

# 初年次教育でラーニングスキル、ティーチングスキルの 向上を目指した組織的取り組み — 「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の実施—

吉田 博、久保田祐歌  
(徳島大学 総合教育センター)

## 1. はじめに

2012年に発表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」において、能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が強く提唱され、これを契機に全国の大学にアクティブ・ラーニングの取り組みが広がってきた（溝上2014）。さらに、2014年度から開始された「大学教育再生加速プログラム」では、アクティブ・ラーニングの取り組みに対する支援が行われるようになり、アクティブ・ラーニングの推進が大学改革の中に位置づけられるようになった。このような背景のもとで、学生の能動的学修を促進するために、初年次に焦点を当て、高校までの受動的な学習スタイルから脱却し、能動的学修を実践していくためのラーニングスキルや学修態度を育成する取り組みが増加している。我が国の初年次教育は、2000年代に入り急速に関心が高まり、実施率は2007年段階で97%に達している。しかし、多くの取り組みが一部の教員に支えられているという指摘もされている（河合塾2010）。以上のことから、アクティブ・ラーニングの導入や初年次教育は、いかに組織的に実施できるかが重要であるといえる。

徳島大学では、学生の主体的・自立的な学修を促すアクティブ・ラーニングを推進するために、初年次教育に焦点を当て、学生と教員の双方に対する取り組みとして、『学生と教員が共に成長する「SIH道場<sup>\*1</sup>～アクティブ・ラーニング入門～」』を開始した。本取り組みは、平成26年度大学教育再生加速プログラムのテーマI（アクティブ・ラーニング）に採択された。

本発表は、実施初年度に当たる平成27年度SIH道場の全貌を明らかにするものである。

## 2. 平成27年度SIH道場

### (1) SIH道場の概要

SIH道場は、徳島大学の1年次全員が受講する初年次教育プログラムであり、学生が学士課程全般にわたってアクティブ・ラーニングを実践していくことができるように、基本的なラーニングスキルを身に付けることを目的としている。内容は、①専門分野の早期体験、②ラーニングスキルの修得（文章力、プレゼンテーション力、協働力）、③学修の振り返りである。平成27年度は、学問領域やその体系性に応じて、学部、学科、専攻などの単位で合わせて15の教育プログラム<sup>\*2</sup>を展開した（図1）。

### (2) 運営体制

SIH道場の実施にあたっては、各教育プログラムの運営に責任を持つ、授業設計コーディネーターを1名以上選出した。授業設計コーディネーターは、当該プログラムの授業計画、担当教員の選出、評価などを行う。総合教育センター教育改革推進部門とコンテンツ作成ワーキンググループは、授業設計コーディネーターに対し、ビデオ教材やテキスト、ルーブリックなどのサンプルを提供し、授業計画、運営、プログラム評価について、助言や支援を行った（図2）。

### (3) 教員のOJT型FD

SIH道場を担当する教員にとっては、SIH道場を担当することがOJT型のFDとして位置付けられている。教員がグループワーク、ディスカッション、反転授業、ルーブリックによる評価などを導入したアクティブ・ラーニング型授業を実践することで、ティーチングスキルを向上させることが目的である。授業実施にあたっては、教育改革推進部門がSIH道場のFD・説明会を実施し、SIH

道場を担当するために必要な知識やスキルなどを提供した。また、自身が担当する授業が終了した後は、eポートフォリオシステムを用いて教育実践の振り返りを行った。平成27年度は全部で188名の教員がSIH道場を担当した。これは、教員全体の約23%に当たる人数である。

(4) 評価・改善

受講者全員を対象とした学生アンケートを実施した(回収率87.5%)。また、SIH道場授業担当教員を対象としたアンケートを実施した(回収率33.9%)。授業設計コーディネーターは当該プログラムを自己評価し、「プログラム設計評価シート」にまとめた。さらに、徳島大学教育について考え提案する学生・教職員専門委員会に「SIH道場評価・改善ワーキンググループ」を設置し、19名の学生委員に対してインタビュー調査を実施した。これらのデータをもとに、「SIH道場振り返りシンポジウム」を実施し、実施報告や評価、次年度の改善に向けた議論を行った。

3. 現状の成果と課題

平成27年度はSIH道場の実施初年度であったが、組織的に全学的な体制を整え、実施することができた。このように、すべての1年次が受講する初年次教育は、本学にとって初めての取り組みとなった。また、本学の約23%の教員がSIH道場の一端を担った。これだけ多くの教員がアクティブ・ラーニング型授業の実践、あるいは体験学習の指導や評価、ポートフォリオを活用した学生とのやり取りなどを経験し、その教育活動について自身の振り返りを行うというFDを実践したことも本学では初めてのことである。

SIH道場の成果としては、学生アンケートからは、80%以上の学生がプログラムに満足していることが伺えた。また、能動的学修(アクティブ・ラーニング)の重要性を理解したと回答した学生も約90%であった。学生アンケートの詳細な結果は(久保田・吉田2016)を参照されたい。一方、教員アンケートでは否定的な意見が多かった。SIH道場の意義や本学が推進しようとしているアクティブ・ラーニングについて、十分に理解され

ていないことが浮き彫りになった。また、SIH道場を実施することに対する負担の声も聞こえてきた。しかし、実際にルーブリックを用いてプレゼンテーションを評価した教員からは、「使いやすかった」と感じた。他の授業でも使ってみよう」という肯定的な意見を聞くことができた。

SIH道場は、学生と教員の双方がアクティブ・ラーニングについて学び、成長することを目的としている。双方にとって成果をあげる取り組みとなるように、継続的な検証と改善が重要になる。

学部	学科	授業科目	担当教員	授業内容	評価方法	授業効果
経済学部	経済学	経済学概論	佐藤 隆	経済学概論	レポート	経済学概論の理解が深まった
		経済学概論	佐藤 隆	経済学概論	レポート	経済学概論の理解が深まった
		経済学概論	佐藤 隆	経済学概論	レポート	経済学概論の理解が深まった
		経済学概論	佐藤 隆	経済学概論	レポート	経済学概論の理解が深まった
工学部	機械工学	機械工学概論	佐藤 隆	機械工学概論	レポート	機械工学概論の理解が深まった
		機械工学概論	佐藤 隆	機械工学概論	レポート	機械工学概論の理解が深まった
		機械工学概論	佐藤 隆	機械工学概論	レポート	機械工学概論の理解が深まった
		機械工学概論	佐藤 隆	機械工学概論	レポート	機械工学概論の理解が深まった

図1 平成27年度SIH道場 教育プログラム



図2 平成27年度SIH道場 実施体制図

注釈

- ※1 SIHとは、Strike while the Iron is Hot. (鉄は熱いうちに打て)の略である。
- ※2 授業内容の詳細については、「SIH道場振り返りシンポジウム」の資料を参照されたい。

参考文献

- 1) 溝上慎一; アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換, 東信堂, 2014.
- 2) 河合塾; 初年次教育でなぜ学生が成長するのか, 東信堂, 2010.
- 3) 久保田祐歌・吉田博; 学生アンケートに基づく初年次教育プログラムの現状と課題, 平成27年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集, 38-39, 2016.

口頭発表